――ヨハンナ・スピリ原作――

ハイディ

（第二十八回）

津田芳雄譯

時々山風が吹きわたるのと、日なたで羽蟲がぶんぶん唸るのと、落葉松の枝で樂しさうにうたふ小鳥の聲の外は、何の物音も聞えなかつた。ゼーゼマン氏はしばらく立ち止まつて、汗ばんだ顔を涼しいアルプスの山風になぶらせてゐた。すると、向ふ側の坂道を誰かが駈け下りて來た。それは電報を持つたペーテルだつた。ゼーゼマン氏は早速手招きした。ペーテルはもじもじしながら、まるで片足がびつこでもあるやうに、蟹みたいな横あるきで、のろのろとやつて來た。

「早く來てくれ給へ。――この道を登つて行けば、おぢいさんと、ハイディといふ子供の住んでゐる、それから、今フランクフルトからお客樣の來てゐる、小屋へ、行けるかね。」

あつと低く叫んだかと思ふと、ペーテルは一目散に逃げて行つてしまつた。あんまり慌てふためいたので、丁度あの寢椅子と同じやうな格好で二三度こんぼ返りを打つて、それからころころと坂道を轉がり落ちた。幸ひ寢椅子のやうに粉みぢんになることだけは助かつたが、電報が身代りになつて災難を引き受け、粉々に裂けて飛び散つた。

「山の人間つて、なんておつそろしく臆病者なんだらう！」

ゼーゼマン氏は、あの世間ずれぬ山の子供があんなに仰天したのは、急に見知らぬ旅人に出會つたからだとばかり思ひ込んだのである。しばらく呆然と、ものすごい勢で轉がり落ちて行くペーテルの後姿を見送つてから、ゼーゼマン氏は又登り

はじめた。

ペーテルは、一生懸命に踏み止まらうとしたけれど、どうしても足が滑つて、なほも小つぴどくとんぼ返りを打ちながら、どこまでも轉がつて行つた。

それでも、こんな痛さや恐ろしさなどはまだましな方で、いよいよフランクフルトからお巡りさんがやつて來たのだといふことの方が、ずつとずつとペーテルには怖かつた。さつき道を訊いたあの旅人こそ、てつきりお巡りさんだと、ペーテルは思ひ込んだのである。デルフリの村近くの一等おしまひの坂道まで轉がつて來た時、ペーテルはしげみに引つかかり、やつとのことで踏み止まることが出來た。でもしばらくは寢ころがつたまま、氣をしづめて、どうすればよいかと考へてゐた。

「いよう、又こんなものが降つて來たぞ！」ペーテルの耳もとで、誰かの聲がした。

「この調子だと、明日は一體、何を押し出してよこす氣なんだらう。まるで縫ひ目のぞんざいな袋から、ぢやがいもをでも押し出すみたいにさ。」

パン屋がげらげら笑つてゐるのだつた。一日の暑い仕事を終へて、一息入れようと、その邊をぶらぶらしてゐると、ペーテルがこの間の寢椅子とそつくりの格好で、ころころ轉がり落ちて來たので、面白がつて見物してゐたのである。これを聞くと、ペーテルは又こわくなつて、後をも見ずに一散に駈け出した。

「押し出す」なんて、それではあのパン屋は、自分が寢椅子を押し轉がしたのを、見てゐたのだらうか。今は何よりも家へ歸つて、寢床にもぐり込んで隱れてゐたかつたけれど、山羊たちが山の上におきつ放しにしてあるので、おぢいさんに叱られるのが怖さに、どうしてももう一度山へ引き返さねばならなかつた。心配と痛さで、今は走る元氣もなく、びつこを引き引き、泣きながらのろのろと山をのぼつて行つた。

ペーテルに逢つてから間もなく、ゼーゼマン氏は坂の途中の目じるしの小屋の前を通つた。それで、道を間違へてゐないことが確かになつたので、又元氣が出て、なほもけはしい長い道のりを登つて行くと、やつとのことで、目ざすおぢいさんの小屋が見え出した。鬱蒼と繁つた樅の梢が、屋根の上でさやめいてゐた。

ゼーゼマン氏はもうほんの僅か險しい山道をの

ぼれば、可愛い娘に會へるのだと思ひ、そのびつくりする樣を思ひ描いて悅んでゐた。ところが、山の上では、子供たちは早くもその姿を見付けて、こちらはこちらで思ひもかけぬ不意打ちをしてあげようと、待ち構へてゐたのだつた。

ゼーゼマン氏が小屋の前の空地へ一歩足を踏み入れるや、二人の子供が歩いて來た。一人は背の高い、金髪にバラ色の頰をした女の子で、まつ黑な瞳でにこにこ笑つてゐるハイディによりかゝつてゐた。ゼーゼマン氏はそれをぢつと見つめてゐたが、急に立ち止まると、涙がこみ上げて來た。一體これはどういふことだ。その金髪の華奢な色白の美しい娘は、亡くなつたクララのお母樣と生き寫しではないか。ゼーゼマン氏は、まつたく夢か現かわからなくなつてしまつた。

「お父さま、あたしがわからなくなつて？」

クララはうれしさうに顏を輝かせながら云つた。

「あたし、そんなに變つて？」

「變つたとも、すつかり變つたねえ。どうしてこんなにも變れたんだらう。一體これはほんたうなんだらうか」

今度は後退りして娘の全身をうれしさうに打ち眺め、目の前からかき消える幻なぞではないことを確かめるやうに、

「これがクララなのかい？ ほんたうに、うちの小つちやなクララなのかい？」

と、幾度も幾度もくりかへしてゐた。

おばあさまが、息子の喜ぶ顏を見に出て來た。

「どうですね。あなたがわたしたちを不意に喜ばせにやつて來て下さつたのにも驚いたけれど、不意打ちくらべなら、こちらに敵はないでせう」

それからしみじみと挨拶をかはし、

「ともかく、わたしたちの第一の恩人の、アルムをぢさんに御挨拶なさい」

「さうでしたね、それから、うちのかあいゝハイディちやんにも」

そしてハイディと握手しながら、

「どうだね、山のおうちへ歸つて、うれしいかね。いや訊くには及ばないね、アルプスのバラより、まだうれしさうな元氣な顏をしてゐぢやないか。ほんたうに、その元氣さうな顏を見せてくれて、なによりもうれしい」

ハイディもうれしさうにゼーゼマン氏のやさし

い顔を見上げた。ほんたうに、いつも親切にして下さつたゼーゼマン氏が、山の上に待ちかまへてゐた。何ものにもまさるこの大きな歡びに浸つてゐるのを見ると、ハイディは自分までうれしくなつて、心が波打つのだつた。

おばあさまは息子をおぢいさんに引き合はせ、二人が挨拶をしてゐる間、樅の木をもう一度眺めようと、裏の方へぶら〳〵出て行つた。すると、ここにも、思ひがけないものが待つてゐた。樅の木蔭に、濃い空色のりんだうのすばらしい花束が、まるでそこに生えてゐるやうに生き生きと、日に輝いてゐるのだつた。

「なんてきれいなんでせう。まあ可愛らしいこと！」

おばあさまはうつとりと見惚れた。

「ハイディちやん、ちよつと來てごらん。あなたでせう、こんな美しいお花でわたしを喜ばせようとしてくれたのは。ほんとに、なんてきれいなんでせうねぇ」

子供たちは走つて來た。

「いゝえ、わたしぢやないんです。でも、誰だか知つてますわ」

「お山の上にはね、おばあさま、こんなのが、この通りの格好で、ぢつさり咲いてゝよ。もつときれいだわ。誰が摘んで來たか、當てゝごらんなさい」

クララがあんまり愉しさうに云ふので、おばあさまはも少しで、クララぢやないかしらと思ひ込むところだつた。でも、いくら何でも、そんなことはある筈がない——

丁度この時、樅の木のうしろで、かさこそと小さな音がした。こつそりと降りて來たペーテルだつた。小屋の前でおぢいさんと話をしてゐる人が誰だか、遠くからでもすぐわかつたので、まはり道をして、こつそりと見付からないやうに拔けて歸らうとしてゐるのだつた。けれどもおばあさまは目ざとくそれを見付け、急に、ああ、お花を摘んで來てくれたのは、きつとあの子なのだ、羞づかしがつて逃げて歸らうとしてゐるのらしいから、呼んで御褒美をやらなくてはと思ひ、

「こちらへいらつしやい、こわがることはありませんよ」

と呼びかけた。